

# シエラレオネ紛争における民間人への暴力の解剖学

## 国家、社会、精神性

落合 雄彦

A

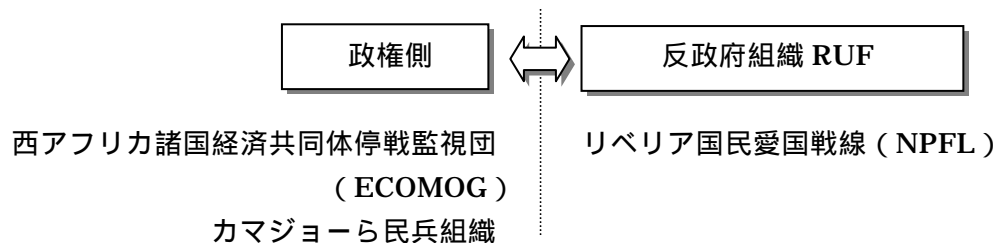
なじみ深い「自分たち」の空間と、その自分たちの空間の彼方にひろがるなじみのない「彼ら」の空間とを心のなかで名付けて区別する、というこの普遍的習慣は、実は地理的区分を行う一つのやり方なのであり、それはまったく恣意的なものであってもかまわないわけである。

<エドワード・W・サイード [1993:129-130]>

### 1. 考察対象としてのシエラレオネ紛争

- 概要：シエラレオネ紛争とは、約 500 万人の人口、北海道よりもやや小さい程度の面積をもつ、西アフリカの小国シエラレオネで 1991 年 3 月に勃発し、2002 年 1 月に一応の終結をみた国内紛争。シエラレオネ革命統一戦線 (Revolutionary United Front of Sierra Leone: RUF) という反政府ゲリラ組織側と政権側の間で泥沼の戦闘が展開された。1997 年からはナイジェリア軍を主体とする西アフリカ諸国経済共同体停戦監視団 (ECOMOG) が軍事介入し、また、カマジョーなどといわれる民兵諸集団が組織され、それぞれ RUF と戦火を交えた。国連 PKO のもとで武装解除が進められた結果、戦闘状態はすでに一応の終結をみている。
- 基本的な対立の構図、あるいは戦争の「スポーツ」モデル (Keen [2001:155]):

B



C

- 特徴：
  - 民族 / 宗教対立的な側面の希薄さあるいは不在
  - 紛争ダイヤモンド問題への国際的な関心の喚起
  - 児童兵問題への国際的な関心の喚起
  - 民間軍事企業、ECOMOG、民兵といった紛争アクターの多様化
  - 民間人への残虐な暴力行為

紛争において民間人が戦闘に巻き込まれたり、戦闘員による暴力の直接的なターゲットにされたりすることは、今日、けっしてめずらしいことではない。しかし、シエラレオネ紛争でみられた民間人への暴力の残虐性は、「(紛争における)暴力とはどれも残虐なもの」といった理解では到底納得しえないものであった。RUF 兵士による民間人の四肢切断 (amputation) は、その象徴的な事例といえよう。

D

また、多くの紛争で見られるとおり、戦闘員による女性への性的暴力はシエラレオネ紛争でも広くみられたが、そのあり様は「異常」というほかない。11歳の少女を強姦したのち射殺し、その両眼を燃やして去って行くRUFの兵士たち。誘拐されてきた少女たちのなかから司令官への最高の「献上品」を探すために、少女たちの下半身を検査するRUFの女性兵士。そうした事実が被害者などの証言から明らかになっている（Human Rights Watch [1999]）。

こうした暴力の残虐性（狂気？）とは一体何か。紛争における暴力は、たしかにいずれの場合も残虐ではあろう。しかし、シエラレオネ紛争の暴力には、たとえば、民族／宗教的なアイデンティティをめぐる「創造された伝統」や「想像の共同体」（パレスチナ人でも、ゲルマン民族でも、フツ人でも、ムスリム過激派でもかまわない）に基づく集団的な激情や激昂、あるいはそれに基づく無差別自爆テロや民族浄化という側面はない。あるいは、ある特定の政治イデオロギーに主導された暴力という形跡もない（カンボジア虐殺など）。また、それは、部隊としての戦闘目的達成や兵士個人の物質的／性的欲求の充足といった合目的な暴力としてだけ理解することも難しい。そこには、いわば不条理（異常）にみえる暴力が不気味に横たわっている。

もちろん、こうした残虐行為は、兵士による麻薬やアルコールなどの乱用によって増幅されていたことは間違いない。しかし、そうした薬物などの乱用という視点だけでシエラレオネ紛争における暴力の残虐性を説明づけることはできない。というのも、RUFには、「住居放火班」（Burn House Unit）、「手切断部隊」（Cut Hands Commando）、「流血部隊」（Blood Shed Squad）、「流血無き殺人班」（Kill Man No Blood Unit）といった、民間人向けの「特殊部隊」が置かれ、かなりシステムティックに暴力が民間人に対して行使されていたからである（Human Rights Watch [1999]）。

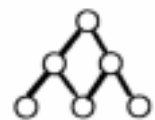
➤ 問題意識：

どうしてシエラレオネ紛争では、これほどまでに残虐な暴力が民間人に対して向けられたのか。多くの研究者がこの問いに自分なりの答えを見出そうとしてきた。本発表は、こうした先行研究を概観した上で、民間人への残虐な暴力についての独自の解釈を試みんとするものである。

2. 国家志向アプローチ（state-oriented approach） from above

➤ Richards [1996]：シエラレオネ紛争に関する最初の主要な研究書

民間人への残虐な暴力行為の解釈 「恐怖心を植え付けたり、投票妨害をしたりするための合理的な選択」



Richards は、まずシエラレオネ紛争の原因を「パトリモニアル国家の危機」とみなす。パトリモニアル（家産制）国家とは、国家指導者や一部の権力者が私的部下を用いて国家という行政手段を私有財産と同じように利用し、秩序づけている制度であり、そこでは、私物化された国家機構や行政機構を通じて、富、地位、契約、雇用、権益、仕事といった様々な資源が上層から下層へと分配され、その代わりに、支持や服従といった代替物が下層から上層へと提供される。Richards は、シエラレオネでは、こうしたパトリモニアル国家を維持するために必要な資源が1980年代の経済危機や冷戦終結後の海外援助の停滞などによって著しく減少してしまったために、大衆、特に若者の不満が高まり、紛争が勃発したとみる。そして、RUF は、もともと革命イデオロギーに支えられた、規律のとれた反政府ゲリラ組織であり、彼らによる四肢や耳を切断するといった

民間人への暴力行為は、けっして無目的なものでも非合理的なものでもなく、それは、人々に恐怖心を植え付けたり、投票を妨害したりするための計算された合理的な選択とみる。

➤ 武内[2000]：今日のアフリカ紛争にみられる特質を詳細に分析した論文

民間人への残虐な暴力行為の解釈 「一部権力者間の利権抗争に結びつけられた、紛争の『大衆化』の一側面」

武内は、今日のアフリカ紛争を基本的に「一部権力者層の間の利権抗争」という性格を強く帯びた国家権力闘争の一形態と位置づける。そして、今日では「国内的な矛盾」がこれまでになく蓄積されてきたために、紛争の「大衆化」(大量の民間人が被害者となり、また加害者ともなる現象を指す)が表出するようになったと指摘する。その上で、武内は、今日のアフリカの紛争における一部権力者間の闘争という限定的側面と紛争の「大衆化」という拡大的側面を両立させるために、パトロン・クライアント関係を援用した分析を試みる。すなわち、1980年代までの多くのアフリカ諸国では、一党制や軍事政権といった集権的政治体制のもとで、政治支配者を頂点としたパトロン・クライアント関係によって構成される資源分配のネットワークが形成されていた。しかし、1980年代の経済危機と経済自由化政策の導入を契機として、そうしたネットワークが分裂化の方向へと動き出し、新たな政治エリートが台頭するなかで、稀少な資源や利権をめぐる権力闘争がこれまで以上に激化するようになる。さらに、90年代の政治的民主化の過程で、そうした政治エリートによる権力闘争が大衆を巻き込む形で展開し、そこにネットワークの再編が進行する。こうしてパトロン・クライアント関係的なネットワークの分裂と再編によって、<一部権力者間の利権抗争の激化>(限定的側面)と<紛争の「大衆化」>(拡大的側面)という一見相矛盾するかにみえる2つの現象が、今日のアフリカ紛争において同時並行的に生じてきたとみる。

➤ 共通概念ツール：パトリモニアリズム、国家、権力闘争、資源、パトロン・クライアント関係、資源を分配する者(政治エリート、権力者、上層、パトロン)、資源の分配を受ける者(下層、クライアント)、ネットワーク、1980年代以降の経済停滞と資源の減少/枯渇

➤ 名 付 け：Allen [1999]は、こうした現代アフリカ紛争研究の立場を「アフリカ政治システムの特質に根ざしたアプローチ」(Approaches rooted in the nature of African political systems)と呼び、Allen自身も同アプローチに属する概念を提起している。本稿では、とりあえずこうした研究の立場を「国家志向アプローチ」(あるいは「ネットワーク思考アプローチ」、「政治的合理選択アプローチ」)と総称したい。それは、国家観のレベルと親和性をもつ「上からの視点」といえる。

➤ シエラレオネ紛争との関係における国家志向アプローチの問題点：

民間人への残虐な暴力行為を十分に説明できないのではないか？

Richards [1996]は、RUFを規律がとれた反政府組織とみなし、民間人への残虐な暴力を「恐怖心を植え付けたり、投票を妨害したりするための合理的な選択」としているが、果たして乳児を含む民間人への四肢切断といったRUFの残虐行為は、戦闘目的や投票妨害とどれほど合理的に結びついた選択であったといえるのか。国家志向アプローチは、合理選択アプローチでもあり、それだけでは必ずしもシエラレオネにおける民間人への残虐な暴力行為を十分に説明することができない。

3. 社会志向アプローチ (society-oriented approach) from below

- Rashid [1997], Abdullah and Muana [1998], Abdullah [1998]: シエラレオネ紛争における若者、特に若年層ルンペンの重要性に注目した研究成果

民間人への残虐な暴力行為の解釈 「RUFの中心的存在となった若年層ルンペンとその文化」

シエラレオネ紛争における反政府勢力の残虐な暴力行為の淵源を、国家志向的/合理選択的なアプローチではなく、社会階層としてのルンペン(ルンペンプロレタリアート)とその文化に求めるアプローチもある。たとえば、Abdullah [1998:207]は、シエラレオネ紛争研究におけるルンペンの若者のことを、「小才を利かせて狡賢く世渡りをしたり、インフォーマルや闇の経済と一般にいわれる世界に片足を踏み込んだりしている、主に男性の失業者あるいは失業しそうな若者」と位置づけた上で、植民地統治下の1940年代にフリータウンを中心に形成されたこうしたルンペン層(マリファナを吸い、しばしばひったくりや恐喝等で生活を立て、ときには“big man”の手下として働くような非行青年たちの階層)が、独立後の1970年代後半になって学生過激派によって反政府学生運動と連結される。そして、1980年代半ばに反政府過激派学生が退学処分を受け、国外に移り住み、やがて彼らによってリビアでの軍事訓練のためのリクルートが始まると、それに密かに志願してきたのは、エリートや高学歴者ではなく、むしろ定職もなく、社会や政権に不満を抱くこうしたルンペンの若者にほかならなかった。そして、リビアでの軍事訓練(1987-88年)ののち、過激派学生は反政府武装闘争の準備から次第に手を引いてしまったため、結果としてRUF指導部を担ったのは、サンコー以下、教育も仕事もないルンペン層の若者にほかならなかった(サンコー自身は若者ではなかったが)。RUFは、学生過激派がその基礎を築いたために、名称などの表層部分には左翼的反政府イデオロギーが残ったが(たとえば、「革命」統一戦線)、内実は若年層ルンペンから構成された武装集団にすぎず、イデオロギー意識においても規律においても著しく脆弱・劣悪な組織になってしまった。それが、シエラレオネ紛争における民間人への残虐な暴力行為の主要な原因の一つである、とAbdullahらは考えた。

- Fanthorpe [2001]: ルンペン層の史的形成過程を分析した論文

Fanthorpeは、Mamdani [1996]の提起した「分枝国家」(bifurcated state)という植民地国家概念を援用しながら、シエラレオネ紛争において残虐な暴力を展開した若年ルンペン層がいかに形成されてきたのかを史的に分析した。

Mamdaniによれば、植民地時代のアフリカでは、「原住民問題」(アフリカの人々をいかに統治するか)に対して、植民地と保護領という2つの空間において異なる対応がみられた。すなわち、一つは、直轄植民地(都市部)におけるヨーロッパ系の植民者による直接統治であり(「集権化された専制」(centralized despotism))、もう一つは、保護領(農村部)における首長(chief)を介した間接統治である(「分権化された専制」(decentralized despotism))(遠藤[2001:56])。そして、宗主国は、首長に支配の正当性を与えるとともに、「慣習法」を成文化することによって、首長の地位を植民地化以前よりも安定化させ、さらにその権限を強化した。こうして、アフリカの植民地国家においては、中央(植民地)ではヨーロッパ系植民者がヨーロッパ本国的な法制度にもとづいて統治する専制政治が成立する一方で、地方(保護領)では植民地化以前よりも強固な支配者となった首長が「慣習法」に基づいて統治するもう一つの専制政治が成立した(これを「分枝国家」と呼ぶ)。そして、アフリカの「分枝国家」において特に重要であった点は、ヨーロッパ列強による

植民地化が最も遅かったアフリカでは、他の植民地（インドなど）とは異なり、「慣習法」の対象のなかに結婚や相続ばかりか土地制度が含まれたことであり、これによって、アフリカでは、土地は首長を核とした共同体の所有に委ねられ、市場流通をしなくなり、結果として、人々は使用权をもつそれぞれの土地にいわば包み込まれてしまった。

Fanthorpe は、こうした「分枝国家」論がシエラレオネにおけるルンペン層形成を理解する上で重要であるとみる。つまり、シエラレオネは「分枝国家」的性格を強く有しており、その植民地（現在の首都フリータウンがある半島とその周辺部分）では「集権化された専制」が、また、保護領（植民地を除く領土）では「分権化された専制」がそれぞれ成立し、特に保護領では 200 もの小規模な首長国（チーフダム）が設けられた。そして、こうした首長諸国は、イギリスの間接統治制度のもとでは、徴税などを行う行政単位として重要な役割を果たし、独立後は地方行政に加え政党の集票マシーンとしても機能してきた（現在の首長国の数は約 150。各首長国には首長国評議会が置かれ、最高首長 *paramount chief*、セクション首長 *section chief*、村落指導者 *village heads* などがメンバーとなっている）。そして、シエラレオネには、このようにして歴史的に、中央／都市部に形成されている中央政府の支配様式（それを独立後はパトリモニアル国家と便宜的にいてもいいかもしれない）とは別個の首長国の支配様式が地方／農村部に形成されてきたのであり、ルンペンの若者（たとえば、ダイヤモンド不法採掘者なども含む）は、そのどちらからも排除され、「市民」でも「臣民」でもないというアイデンティティの危機に直面してきたのであり、土地をもったり、投票をしたり、社会サービスを受けたりする基本的な権利からさえ中央と地方の両面から排斥されてきた。シエラレオネ紛争における残虐な暴力行為の一つの史的淵源は、2つのブロックから弾き出されたルンペン層の若者が、反政府勢力の中核を担ってきたところにあるとされた。

- 共通概念ツール：ルンペン、若者、都市・地方関係、教育、仕事、文化、学生、犯罪、非行、社会階層の史的形成
- 名 付 け：Allen [1999:374]は、こうした現代アフリカ紛争研究の立場を「社会・文化・個人ファクターを用いたアプローチ」(*Approaches using social, cultural and individual factors*)のなかに位置づけている。本稿では、とりあえずルンペン概念を強調する立場を「社会志向アプローチ」（あるいは「ブロック思考アプローチ」と総称する。それは、エリート権力闘争や資源分配のネットワークではなく、疎外された若年層の存在に注目した「下からの視点」といえる。
- 社会志向アプローチを越えて：

社会志向アプローチ（特に Fanthorpe の議論）を用いると、なぜ、シエラレオネではカマジョーのような民兵が、コンゴのような中央エリートの私兵としてではなく、地方の首長の指導下で形成されてきたのかが、比較的容易に説明できる。つまり、ルンペンの若者は、中央と地方という2つのブロックから疎外されてきたのであり、彼らを母体とする RUF は、そうした「分枝国家」シエラレオネのなかで、2つの「敵」（中央と地方）と対決する、いわば「二面戦争」を戦ってきたといえる。そして、RUF の「宣戦布告」に対応するために、中央と同様に地方もまた独自の軍事部門を自衛的に整備する必要があった。それが民兵である。

しかし、民間人に対する RUF の残虐なる暴力がルンペン文化によるものだとしても、あるいは、ルンペン層が中央と地方から二重に排除されつつ形成されてきたというプロセスがあるとしても、社会志向アプローチには未解決の部分が残る。それは、残虐行為を行った RUF 兵士の心性の問題である。RUF 兵士は、単に略奪や強姦といった物質的／性的な欲求充足のためだけではなく、民間人に対してほとんど理解不能ともいうべき残虐な暴力行為をかなりシステムティックに繰り返し展開した。その心性とは何か。「ルンペンは、ゴロツキ、非行少

年、チンピラであり、彼らがゲリラ兵になったから、シエラレオネ紛争では民間人に対する残虐な暴力行為が広く展開された」といった表面的な理解以上に、ルンペンという既成概念から離れて、RUF 兵士の残虐な暴力行為を規定している心性、あるいはその思考の型のようなものが明らかにされる必要があるのではないか。それは、「ある社会的カテゴリーの人々は悪いことをする」といった理解の仕方ではなく、「なぜするのか」という内面の心理や思考パターンに注目することであり、残虐な暴力行為を、社会の視点からではなく、心性から読み解くことを意味する。

A

#### 4 . 精神性志向アプローチ (spirituality-oriented approach) from within

- Ellis [1995, 1999] : リベリア紛争における暴力の宗教的側面を分析した成果

リベリア紛争におけるゲリラの奇妙な服装や残虐な暴力を、かつて秘密結社指導層の統制下にあった、霊的力の獲得を伴う仮面儀礼や食人儀礼の宗教性が、いわば「民営化」されて拡大した帰結とみる。

- Behrend [1995, 1998] : ウガンダにおける「主の抵抗軍」(LRA) の暴力がもつ宗教的側面を分析した成果

アチョリ人を主体とする LRA がアチョリ人の民間人に暴力を振るうのは、罪深い民族の贖罪のためと理解されている点を指摘する。

- 落合[2003] : ラスタファリアンと共振した「民間人を敵視する心性の暴力」仮説「システム」概念とラスタファリアンの心性

「システム」(*DE SYSTEM*) は、シエラレオネ紛争の言説のなかにしばしば登場する概念である。それは、もともとジャマイカのラスタファリアン(ラスタ)の反体制思想から生まれ、レゲエ音楽を媒体としてシエラレオネに伝えられた。

ラスタファリ(アン)運動は、1930年代にエチオピア皇帝ハイレ・セラシエ世を生き神としてジャマイカで誕生した新宗教運動である。統一した教団組織や指導者をもたず、多様な集団と個人から成る無頭型の運動体であり、今日では、ジャマイカを含むカリブ海地域のほか、欧米・アフリカ諸国などにも伝播している。

ラスタファリアン(ラスタ)は、旧約聖書時代にバビロンに捕囚されたユダヤ人の経験と大西洋奴隷貿易時代にアフリカから奴隷としてジャマイカに連れてこられた自分たちの先祖の経験を結びつけ、自分たちが生活しているジャマイカを「バビロン」(地獄)、エチオピア(アフリカ)を「約束の地」(天国)、自分たちを「捕囚の身」として位置づける。その上で、そうした黒人を抑圧する白人西洋物質文明主導の体制全体を「バビロン・システム」あるいは単に「システム」と呼び、古代イスラエル人の化身である黒人がやがて「システム」を打倒してエチオピア(アフリカ)へと帰還を果たし、そこから全世界を統治する日が到来する、と信じているという。

ジャマイカの一般の人々はしばしばラスタを蔑視したり、危険視したりしてきた。これに対して、ラスタ側も普通の人々を敵視してきた。ラスタは、一般的なジャマイカ人というのは、「システム」に完全に洗脳されており、自分たちが抑圧された黒人であることさえ忘れてしまっている「愚者」であり、「システム」に対して抵抗を試みないばかりか、それに協力さえしようとする「裏切り者」にほかならないとみなす。つまり、ラスタの心性においては、「抑圧者としての権力者」と「被抑圧者としての大衆」の間に本来あるはずの大きな差異や懸隔が完全に捨象され、一般の人々が「システム」と同一視されて「敵対者」へと仕立て上げられてしまっているのである。

B

C

D

## シエラレオネ紛争における反政府兵士の心性

シエラレオネ紛争において民間人に暴力を加えた反政府勢力兵士の心性は、実は、こうした普通の人々を「システム」と同様に敵視するラスタの心性となんらかの形で通底していたのかもしれない。

「システム」概念に代表されるラスタの反体制思想は、レゲエ音楽という媒体を通して独立後のシエラレオネに伝えられ、都市部を中心に若者を魅了するようになった。しかし、本発表は、ジャマイカからシエラレオネにレゲエ音楽を通じて伝えられたラスタの反体制思想が、RUF 兵士の思考様式に直接的な影響を与えていたとか、それが民間人への残虐な暴力の主要な原因となっていたとかと主張するものではまったくない。

本発表は、「ジャマイカのラスタの心性」と「シエラレオネの反政府兵士の心性」が直接的な「因果の関係」にあったと主張するものではなく、むしろ、その主張とは、両者が間接的な「共振の関係」にあったのではないかと、という点にある。ここでいう「共振の関係」とは、離れた位置にある 2 つの物体 つまり、直接的には接触していない 2 つの物体 がなんらかの構成要素を共有しているがゆえに、第 3 者の外部刺激に対して固有の振動を共にみせるような関係として一応位置づけておきたい。そして、本稿の仮説とは、「ジャマイカのラスタの心性」と「シエラレオネの反政府兵士の心性」が直接的な「因果の関係」にはないものの、なんらかの相似性をもつ「共振の関係」にあったのではないかと、いうものである。

シエラレオネの反政府勢力兵士は、民間人を単に「弱者」としてだけではなく、ラスタと同様、「システム」に協力する「裏切り者」あるいは「敵対者」とみなし、憎悪していたのであろう。だからこそ、彼らは、民間人に対して、単に物質的あるいは性的な欲求充足のための暴力だけではなく、四肢切断のような残忍な暴力を広範かつシステムティックに加えたのではなかろうか。民間人は、「弱者」として RUF 兵士による暴力の単なる「餌食」にされていただけではなく、「システム」に準じる「敵対者」としてその直接な「攻撃目標」とされていた。それゆえに、同紛争では、民間人に対する残虐な暴力行為が、かくも広範かつ組織的に展開されたのではなかろうか。

### 5. むすびに 複数形の紛争、複数形の暴力

シエラレオネ紛争とは、必ずしも「単数形の紛争」( a conflict )ではなく、エリートに主導された国家権力闘争や疎外された若者の叛乱であると同時に、中央と地方の専制的な支配様式への二面戦争でもあり、さらには、「システム」とそれに追従する一般市民への全面戦争でもあるという、いわば重層的な意味合いをもつものであったのかもしれない。そして、もし、西アフリカの小国シエラレオネで約 11 年間にわたって展開された武力紛争が、実はそうした様々なレベルや意味合いの闘争から成る「複数形の紛争」( conflicts )であったとするならば、そこで展開された一般市民への残虐な暴力の原因を、本発表で考察してきた諸アプローチのいずれかひとつだけに依拠して完全に解明することは、おそらく不可能であろう。「複数形の紛争」は、必然的に「複数形の暴力」を孕むものであり、そうした暴力の分析には、諸アプローチの複眼的な活用が不可欠であるに違いない。

3つのアプローチの比較

類型	視点	中心的なイメージ概念	紛争観	民間人への残虐な暴力の解釈
国家志向アプローチ	上からの視点	ネットワーク	パトリモニアル国家への若者の叛乱、ネットワーク再編を伴うエリート権力闘争	合理的選択、「紛争の『大衆化』」の一側面
社会志向アプローチ	下からの視点	ブロック	中央と地方という史的ブロックの支配様式に対するルンペンの二面戦争	ルンペンとその文化
精神性志向アプローチ	内からの視点	「システム」	「システム」とそれに協力する民間人への全面戦争	ラストと共振し、民間人を「システム」と同一視して憎む心性

A

B

C

D

<参考文献>

- 遠藤貢[2001]「アフリカにおける『伝統社会』と近代」、『国際問題』第499号、pp. 52-66。
- 落合雄彦[1999]「ECOMOGの淵源 アフリカにおける『貸与される軍隊』の伝統」、『アフリカ研究』(日本アフリカ学会)第55号、12月、pp. 35-49。
- 落合雄彦[2000a]「シエラレオネにおける国連部隊襲撃拘束事件」、『アフリカレポート』第31号、9月、pp. 7-10。
- 落合雄彦[2000b]「ECOWAS 停戦監視団( ECOMOG )とは何か」、『NIRA 政策研究』第13巻第6号、pp. 38-41。
- 落合雄彦[2001a]「シエラレオネ」、『総合研究開発機構(NIRA)・横田洋三共編『アフリカの国内紛争と予防外交』、国際書院、pp. 206-213。
- 落合雄彦[2001b]「アナーキカル・ソサイエティ? 現代アフリカ紛争をめぐるイメージの諸相」、『敬愛大学国際研究』第7号、3月、pp. 21-59。
- 落合雄彦[2002]「シエラレオネ紛争関連年表」、『武内進一編『アジア・アフリカの武力紛争 共同研究会中間成果報告』、日本貿易振興会アジア経済研究所、pp. 179-233。
- 落合雄彦[2003]「シエラレオネ紛争における一般市民への残虐な暴力の解剖学 国家、社会、精神性」、『武内進一編『暴力と紛争の間』、日本貿易振興会アジア経済研究所(公刊予定)。
- サイド、エドワード・W [1993]『オリエンタリズム』(上)(板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳)平凡社。
- 武内進一編[2000]『現代アフリカの紛争 歴史と主体』、日本貿易振興会アジア経済研究所。
- 武内進一[2000]「アフリカの紛争 その今日的特質についての考察」、『武内進一編『現代アフリカの紛争 歴史と主体』、pp. 3-52。
- 武内進一[2001]「『紛争ダイヤモンド』問題の力学 グローバル・イシュー化と議論の欠落」、『アフリカ研究』第58号、pp. 41-58。
- 津田みわ[2000]「複数政党制移行後のケニアにおける住民襲撃事件 92年選挙を画期とする変化」、『武内進一編『現代アフリカの紛争 歴史と主体』、pp. 101-182。
- 楢林健司[2001]「シエラレオネ内戦に対する西アフリカ諸国経済共同体と国際連合による介入」、『愛媛法学会雑誌』第27巻第4号、pp. 119-158。



- パリー、G [1982] 『政治エリート』(中久郎他訳) 世界思想社 ( Parry, Geraint [1969] *Political Elites*, George Allen & Unwin (Publishers) Ltd. )
- バレット、レナード・E[1996] 『ラスタファリアンズ レゲエを生んだ思想』(山田裕康訳) 平凡社 ( Barrett, Leonard [1977, 1988] *The Rastafarians: Sounds of Cultural Dissonance*, Boston: Beacon Press )
- 真島一郎[1997] 「西大西洋中央地域 (CWA) とポロ結社の史的考察 シエラレオネ、リベリア、ギニア、コートディヴォワール」、『アジア・アフリカ言語文化研究』(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所) 第 53 号、pp. 1-81。
- 峯陽一[1999] 『現代アフリカと開発経済学 市場経済の荒波のなかで』、日本評論社。
- ミルズ、C・ライト[1969] 『パワー・エリート』(上・下)(鶴飼信成・綿貫譲治訳) 東京大学出版会 ( Mills, C. Wright [1956] *The Power Elite*, New York: Oxford University Press )
- 六辻彰二[2002] 「シエラレオネ内戦の経緯と展開 1991-2001」、『アフリカ研究』第 60 号、pp. 139-149。
- Abdullah, Ibrahim [1998] “Bush Path to Destruction: The Origin and Character of the Revolutionary United Front / Sierra Leone,” *The Journal of Modern African Studies*, Vol. 36, No. 2, pp. 203-235.
- Abdullah, Ibrahim, and Patrick Muana [1998] “The Revolutionary United Front of Sierra Leone: A Revolt of the Lumpenproletariat,” in Christopher Clapham, ed., *African Guerrillas*, pp. 172-193.
- Allen, Chris [1999] “Warfare, Endemic Violence & State Collapse in Africa,” *Review of African Political Economy*, No. 81, pp. 367-384.
- Bangura, Yusuf [1997] “Understanding Political and Cultural Dynamics of the Sierra Leone War: A Critique of Paul Richards’s *Fighting for the Rain Forest*,” *Africa Development*, Vol. XXII, Nos. 3/4, pp. 117-148.
- Behrend, Heike [1995] “The Holy Spirit Movement & the Forces of Nature in the North of Uganda: 1985-1987,” in Holger Bernt Hansen and Michael Twaddle, eds., *Religion & Politics in East Africa: The Period since Independence*, London: James Curry, Nairobi: E.A.E.P., Kampala: Fountain Publishers, Athens: Ohio University Press, pp. 59-71.
- Behrend, Heike [1998] “War in Northern Uganda: The Holy Spirit Movements of Alice Lakwena, Severino Lukoya and Joseph Kony (1986-97),” in Christopher Clapham, ed., *African Guerrillas*, pp. 107-118.
- Bundu, Abass [2001] *Democracy by Force?: A Study of International Military Intervention in the Conflict in Sierra Leone from 1991-2000*, Universal Publishers.
- Clapham, Christopher ed. [1998] *African Guerrillas*, Oxford: James Curry, Kampala: Fountain Publishers, Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press.
- Clapham, Christopher [1998] “Introduction: Analysing African Insurgencies,” in Christopher Clapham, ed., *African Guerrillas*, pp. 1-18.
- Ellis, Stephen [1995] “Liberia 1989-1994: A Study of Ethnic and Spiritual Violence,” *African Affairs*, Vol. 94, No. 374, pp. 165-197.
- Ellis, Stephen [1999] *The Mask of Anarchy: The Destruction of Liberia and the Religious Dimension of An African Civil War*, London: Hurst & Company.
- Fanthorpe, Richard [2001] “Neither Citizen Nor Subject?: ‘Lumpen’ Agency and the Legacy of Native Administration in Sierra Leone,” *African Affairs*, Vol. 100, No. 400, pp. 363-386.

A

B

C

D

- Goreux, Louis [2001] *Conflict Diamonds*, Africa Region Working Paper Series No. 13, Washington, D.C.: The World Bank, March.
- Howe, Herbert M. [1998] "Private Security Forces and African Stability: The Case of Executive Outcomes," *The Journal of Modern African Studies*, Vol. 36, No. 2, pp. 307-331.
- Human Rights Watch [1997] *The Scars of Death: Children Abducted by the Lord's Resistance Army in Uganda*, New York, Washington, London and Brussels: Human Rights Watch.
- Human Rights Watch [1999] *Getting Away with Murder, Mutilation, and Rape: New Testimony from Sierra Leone*, July, Vol. 11, No. 3(A), New York: Human Rights Watch [cited 28 October, 2002]. Available from <http://www.hrw.org>; INTERNET.
- Kandeh, Jimmy D. [1992] "Politicization of Ethnic Identities in Sierra Leone," *African Studies Review*, Vol. 35, No. 1, April, pp. 81-100.
- Kandeh, Jimmy D. [1999] "Ransoming the State: Elite Origins of Subaltern Terror in Sierra Leone," *Review of African Political Economy*, No. 81, pp. 349-366.
- Kaplan, Robert D. [1994] "The Coming Anarchy: How Scarcity, Crime, Overpopulation, Tribalism, and Disease Are Rapidly Destroying the Social Fabric of Our Planet," *The Atlantic Monthly*, February, pp. 44-76.
- Keen, David [2001] "Sierra Leone: War and Its Functions," in Stewart, Frances, Valpy FitzGerald and Associates, *War and Underdevelopment*, Volume 2, Countries Experiences, New York: Oxford University Press, pp. 155-175.
- Mamdani, Mahmood [1996] *Citizen and Subject: Contemporary Africa and the Legacy of Late Colonialism*, Kampala: Fountain Publishers, Cape Town: David Philip, London: James Curry.
- Muana, Patrick K. [1997] "The Kamajoi Militia: Civil War, Internal Displacement and the Politics of Counter-Insurgency," *Africa Development*, Vol. 22, Nos. 3/4, pp. 77-100.
- Musah, Abdel-Fatau, and J. 'Kayode Fayemi, eds. [2000] *Mercenaries: An African Security Dilemma*, London and Sterling, V.A.: Pluto Press.
- Peters, Krijn, and Paul Richards [1998] "'Why We Fight': Voices of Youth Combatants in Sierra Leone," *Africa*, Vol. 68, No. 2, pp. 183-210.
- Rashid, Ishmail [1997] "Subaltan Reactions: Lumpens, Students, and the Left," *Africa Development*, Vol. XXII, Nos. 3/4, pp. 19-43.
- Revolutionary United Front of Sierra Leone [n.d.] *Footpaths to Democracy: Toward A New Sierra Leone*, [cited 19 November 2002]. Available from [http://www. sierra-leone.org](http://www.sierra-leone.org); INTERNET.
- Richards, Paul [1996] *Fighting for the Rain Forest: War, Youth & Resources in Sierra Leone*, The International African Institute, Oxford: James Curry, Portsmouth, NH: Heinemann.

A

B

C

D